

# 平成 24 年 事業報告書

(平成 24 年 8 月 1 日～12 月 31 日)

公益社団法人 国際 IC 日本協会

## 公益事業 1 国際会議の開催による国の健全な発展及び世界平和に資するための事業

実施期間：8 月 22 日（水）～29 日（水）

平成 24 年は、第 18 回アジア太平洋青年会議（APYC）をこの国際会議とした。平成 23 年 8 月に計画・実行の中核を担う実行委員会を立ち上げ、国内的には NPO 法人コモンビートとの連携協力により、テーマを「絆」とすることを早々に決定し毎月の実行委員会で綿密な計画を立て諸準備を重ねた。一方、国際的には IC インターナショナルコミティー（国際委員会）との間で、電子メールと Skype による合同会議により丹念な意思疎通を図りつつ、準備を重ねた。8 月中旬には、主だった国際委員会メンバーが来日した。

インド、インドネシア、英国、オーストラリア、カナダ、韓国、カンボジア、台湾、中国、ニュージーランド、フィジー、ベトナム、マレーシアという 13 の国・地域から来日した 36 名の青年たちに加え、日本は東北の被災地から招待した学生 5 名を含め、関東、中部、関西地域から参加した参加者、通訳ボランティア等のスタッフと併せ総勢 96 名の参加者となった。

東北での大震災を体験した参加者の生の声が参加者の心を揺さぶり、深い絆が生まれた。又、韓国や中国からの参加者と日本の青年たちが率直に日中韓の関係について



■ 福島のことを忘れないでと訴えた福島大学からの学生参加者

語り合ったこと、フィジーの島が沈んでゆくのは私達の生活と繋がっているといった環境問題、カンボジアの内戦の悲劇、物価水準の異なる国々からの若者が自動販売機の飲料水を滞在中に購入するのにためらうなどさまざまな問題を共有し学ぶことができた。世界の貧富の差の現実を身をもって体感したワークショップ「もし世界が百人の村だったら」や、(株)アイアックインターナショナルの河野フランス静介会長、ピースボートの吉岡達也共同代表、そして矢野弘典当協会会長による、様々な角度の視点からなる、社会、世界への貢献の在り方を学んだ講演、それぞれの創造性を引き出したドラマや音楽等々のワークショップも開催された。又、参加者に大きな印象を与えたのは、自分を深く内省する、「静かな時間」で、自分のこれまでの生き方やこれからの生き方を考える上で大きな示唆が与えられた。又、10 人余りのメンバーで行った、ファミリーグループでは、それぞれのこれまでの人生を分かち合うストーリーテリングを行い、参加者がまさに一つのファミリーとなったかのような深い絆が結ばれた。多くの参加者が「このような深い胸の内を語るという経験は初めてだった」、「自分が変わっていくことを実感した」と語り、また、「小さな行動が世界を変えることが一貫して会議の中で伝えられていたと思う。私はこのメッセージを受けとめ、実践したい。このメッセージを強く信じようと

決めた」と感想文に記している。

最終日には一週間のその集大成として、富士吉田での会議には参加できなかった人々も加え、再び東京・代々木のオリンピックセンターで発表する舞台もあり、各々自分が次になすべき一步を確認することができた。閉会式では、台湾のIC協会のシュー・ショーフン会長が、「今日ここにいる APYC 参加者とここにいらしたお客様との共通の鼓動（コモンビート）を感じます。静けさの中からこのエネルギーが生まれました。心の奥深くから生まれて来る考えやひらめきを聴いてお互いに分かち合う、そして過去の過ちを正す勇気を持つ事を何度も繰り返しました。そこから明るい未来と新しい希望、そして自信が生まれてきます。21世紀はアジアの世紀と言われます。これは私達アジアの若者たちにとっては大きな挑戦の時です。一人ひとりが公平で平和な持続可能な世界を創造する為に必要とされています。私たちはこれからの世界に問題を起こすのか、それとも答えを見つけるのかのどちらかを選ぶ必要があります。今、私たちには、変革へのモデルが必要とされています。世界に起きている憎しみによる分裂、恐れ、絶望にさいなまれる人々への希望と愛と信頼の懸け橋となることが求められています。これが我々の共通のミッションだと信じています。さあ、皆さん今ここからスタートしましょう。あなたと私と共に歩みましょう。この21世紀に地球村の絆を作るために！」と述べた。尚、この会議の開催に当たっては、財団法人MRAハウスと一般社団法人東京倶楽部からの助成金、及び、一般社団法人 NEXCO 中日本基金、そして内外 108 名の方々からの寄附を頂いた。



## 公益事業2 青少年の健全育成事業

### ア. 学校訪問プログラム

実施期間：2012年9月22日～11月26日

概要：今年、IC及びアメリカのNPO・Up With Peopleの国際青年リーダー育成プログラムの訓練を受けた日本人女性の村岡真梨さんを含めた下記の4名が財団法人MRAハウスの助成を受けて学校訪問を行った。9月下旬に東京に集結し、ICハウスで1週間合宿しながらチームづくりに専心した。10月初めより約2ヶ月に亘り各地の小学校から大学まで32校を訪問し、「出会い・ふれあい・学び合い」のモットーのもと国際理解と心を育

てるための交流活動に従事した。交流会では各国の文化の紹介と共に IC のメッセージを伝える歌や寸劇、そして各人の IC を通じての学びの体験を披露し、触れ合った多くの人々の心の中に夢と希望の種まきをしていった。

## 学校訪問参加者

### 1. 村岡 真梨 (日本)

1984年奈良県に生まれる。大学卒業後、銀行に4年間勤務。2011年7月から国際的なリーダーシップを身に付けることが目的であるアメリカのNPO・Up With Peopleのプログラムに半年間参加し、世界20カ国の青年約100人と共に、学校訪問、ミュージカル・ショーの上演、そして、ボランティア活動をしなが、アメリカ、メキシコ、フィリピンの約20都市を訪問。2012年の1月からは、同Up With Peopleの新しいショーを制作するダンススタッフとして1ヶ月間活動した。又、2012年の5月から8月までは、3ヶ月にわたって世界各国を回る「ピースボート」のプログラムにボランティア・スタッフとして参加しながら、船内で青年たちにミュージカル上演のための指導を行う。特技はダンス。

### 2. ズーニー・ダシ (Ms. Zooni DASH、インド)

1988年にインドで生まれる。カルカッタのジャダブプール大学で社会学の修士号を取得。2004年にICの青年会議に参加したのをきっかけに、2008年からインドICの青年チームのコーディネーターを務めてきた。2011年9月からはインドICセンターでインターン生のコーディネーターを務めている。他のインドのNGOにも関係し多くのワークショップなどを運営してきた。趣味は読書、旅行、料理、歌。又、色々な人と出会うことに関心がある。家族は両親と兄が1人。初めての来日。ヒンズー教徒。

### 3. パク・スヨン (Ms. Sooyoung PARK 朴 洙英、韓国)

1990年、韓国で生まれる。嘉泉大学(新聞放送学科)学生。2010年に韓国で開かれたIC青年キャンプに参加。又、同年、マレーシアで開催されたICアジア・太平洋青年会議に参加した。2011年に韓国で開かれたIC青年キャンプではインターンとして運営に参画した。趣味はギター。家族は両親と2人の姉、そして、弟が1人。初めての来日。クリスチャン(カソリック)。

### 4. マーシー・ワブケ (Ms. Mercy WABUKE、ケニア)

1987年生まれ、ケニア・ナイロビのモイ大学を本年2月に卒業(情報科学専攻)。現在大学院進学に向けて準備中。平和を作り出すためのICの女性グループによる「ピース・サークル」等のボランティア活動をこれまでも熱心に行ってきたが、更に、ケニアの田舎に住む子供たちや、ケニア北部にある、アフリカ最大の難民キャンプで子供たちに英語やスポーツ等を教える計画を立てている。2009年にインドICセンターでインターン生として6ヶ月間活動した他、2011年にはスイス・コーのIC世界会議場でインターンを務めた。趣味は、読書とダイビング等スポーツ、料理、写真撮影等。2010年に続いての2回目の来日。クリスチャン。

## 主な活動

### (1) 被災地福島での学校訪問と被災者との交流

10月2日-3日

今夏の APYC に東日本大地震で被災した地域より選抜された 5 人の特別枠で参加した福島大学の学生の招待により、同大学で大震災からの復興ボランティア活動に取り組む学生たちとの交流が行われた。そして、仮設住宅居住者の方の過酷な体験を聞き、南相馬市を視察することからスタートしたことも、その後、各学校を訪問する上で大きな意味を持った。

## (2) 富士市での 学校訪問

10 月 8 日-12 日

今年初めて静岡県教育委員会の要請により、県内の富士市内の 4 校（富士市立青葉台小・元吉原中の 2 校と静岡県立吉原高校・県立特別支援学校）を訪問し、9 回の交流会を行った模様が、2 回にわたり地元の富士ニュースを通じて取り上げられた。

特に今回初めて参加した村岡真梨さんの海外での異文化体験を通して、日本人のコミュニケーションの仕方と国民性に触れた実体験は、生徒達に強烈な印象を与えたことが感想文から読み取れた。また、日本国の象徴である「日の丸」に対する無関心・無知への反省が生徒の感想文からのみでなく、交流会直後の振り返りの際、複数の先生方の口からも語られた。

「相手を思いやる自分の行動が世界を変えていくことができるというメッセージが強く伝わってきました。子どもたちが素直に自分の心に問いかけ、家に帰ったらやろう（家族に何か親切にしよう）と思うことを話したことに感動しました。もしこのような機会があったら、2～3 年生にも体験させたいと思いました」という小学校の先生の感想も寄せられた。

交流会の実施結果については、生徒の感想文と共に直接関わった管理職及び担任教師のアンケート結果と共に、後日安部教育長・田中学校教育課長に届けられた際口頭による概況報告も行われた。その結果、次年度は浜名市等での学校訪問が予定されている。

## (3) 小田原市での学校訪問

10 月 13 日～20 日

小田原市教育委員会を通じて、小田原市立下中小・三の丸小・芦子小・早川小・桜井小・千代小・富水小・東富水小、前羽小・国府津小の計 10 校を回り、多くの児童と直接に交流を行った。これに加え、小田原滞在中ホストファミリーとの心の交流、二宮尊徳を祀る報徳二宮神社で尊徳思想と日本文化に触れると共に、加藤憲一市長を表敬訪問し、学校教育部長・学校教育課長・教育主事の 3 人の同席のもと、それぞれの活動紹介と共に生徒との交流を通して感想を語った。併せて和田重宏教育委員長にも個別に活動報告を行った。

## (4) 福岡県、佐賀県での学校訪問

10 月 23 日～31 日

最初に訪れた北九州市では、今回も小倉東ライオンズクラブの全面的な支援を受け、北九州市教育委員会を通じてアレンジされた、市立千代中、八幡西特別支援学校、市立鳴水小、市立千代小学校を訪れ、児童・学生たちに国際理解を深め、より良いコミュニケーションを図るためのプレゼンテーションを実施した。又、北橋健治北九州市長と柏木修教育長への表敬訪問を行った。

「本日は、素敵な交流を実施していただき、ありがとうございました。児童や生徒のみなさんの笑顔や反応を拝見し、外国の方と直にふれあうことの大切さに改めて気付かされたひと時でした。また、ボランティアグループの皆様のすばらしいプレゼンテーションに、感動しました。全力で児童・生徒に接して下さる姿、伝えようとされている姿に、あの場にいさ

せていただいた全ての方々が心温まる素敵な時間が過ごせたことを心より感謝申し上げます」 北九州市教育委員会指導主事

「各国のボランティアの皆様のノリのよさに圧倒されることなく、体を前後に揺らして喜びを表現する生徒、満面の笑みを浮かべる生徒など、想像していた以上にというよりは、驚きに近いものがありました。普段、人前ではあまり発言しない（音声言語でコミュニケーションを図ることが苦手な）生徒が、挙手して発表する姿に感動しました」という特別支援学校の先生の感想も寄せられた。

昨年に引き続き、福岡市では、香蘭女子短期大学、ILP お茶の水医療福祉専門学校、中村学園大学を訪れた。それぞれの国の文化紹介はもとより、“自分の家族や周りの人々との人間関係をどのように向上させられるか”、“自分の人生をどのように有効に使うか”など、ワークショップや寸劇、メッセージソング、又、それぞれの体験を分かち合うことを通して、学生たちに考える機会を提供した。

「自分から父に対する接し方を変えたら、お父さんの自分に対する接し方も良い方へ変わったということを知り、私も人間関係で悩んだときには、自分から相手に対する接し方を変えたいと思った」、「わずか90分の授業だったがたくさんのことを感じた。日本だけでなくほかの国のことも知ることができ価値観・世界観が広がった感じで、自分の悩みがとても小さく見えた」、「日本人は恥ずかしがり屋が多いと言われたが、自己主張に欠けており、遠慮がちなのを改めて、卒業までにみんなの前で積極的に話せるよう努力したい」、「紙による人生 Work で、残された自由時間の少なさに気付くことができ、今後自分のやりたいことをしっかり考え、一度しかない人生を優先順位をつけて有意義に生きたい」等の大学生の感想が寄せられた。

又、今年初めて佐賀県の西九州大学を訪れ、東日本大震災の被災地でボランティア活動に従事した学生たちとの体験の交換も図った。

#### (5) 広島訪問

11月1日～2日

初めて行われた、なぎさ公園小学校での交流後には、「国々の紹介、劇、音楽と子ども達があきない展開だったので、私も何度も質問しそうになりました。特に『指差し』の歌は私もとても興味深く聴かせていただきました。国を思う気持ちや、家族、友達を思う気持ちなど、『心』について外国の方からお話いただいたことはなかったので、改めてその大切さや自分自身の振り返りができていないことなどに気付くことができました」との先生からの感想が寄せられた。また、広島平和記念資料館を見学し改めて平和の大切さを実感した。

#### (6) 岐阜訪問

11月3日～5日

今年初めて恵那市の大井第二小学校を訪問した。先生からは、「それぞれの国の衣装や髪型、生活習慣などを実物や地図をもとにお話いただけたことは、児童にとってとても興味深いものでした。質問の時間が設けられていたことで、児童の素朴な疑問やもっといろいろ知りたいという意欲を刺激され、多くの児童が主体的に海外に目



を向けて考えることができた点が良かったです。早速外国の国旗の本を借りた子がいました」との感想が寄せられた。

(7) 東京・関東地区での訪問校

10月5日、11月8日～22日

国際基督教大学（ICU）、桐蔭横浜大学、啓明学園（高等・初等・幼稚園）、杉並区立沓掛小学校、大田区立道塚小学校、つくば市上郷小学校、つくばインターナショナルスクール等を訪問し、プレゼンテーションを行ったり、意見交換をしたりと、いろいろな形で交流を行った。これらの訪問の合間にも、大学生を始めとした多くの青年たちとの個別のミーティングを持ち、相互理解を深めた。

(8) ICセミナーへの参画

11月17日～18日

後述する富士箱根ゲストハウスにおいて『One World Family』のテーマで開催されたICセミナーに参加し、各地での学校訪問等を体験して感じた日本での体験や気付きについて発表したのを始め、多様なバックグラウンドを持つ他の参加者たちと深い交流を行った。

(9) 日本への理解の深まり

東京での滞在を振り出しに、被災地福島への訪問、静岡・小田原・福岡・佐賀・広島・岐阜・つくば市への訪問・滞在、更には鎌倉等の訪問等を通して、日本の多くの伝統文化にも触れた。又、日本の家庭でのホームステイの体験を通じ、日本人の日常生活や生活文化への理解も深めた。3名の海外からのボランティアも、それぞれ多くの親しい日本人の友人たちを作り、帰国後も連絡を取り合う関係が生まれている。

(10) 今後に向けての課題

今年10年目を迎えたこのプログラムは、次に述べる3つの意味で画期的な年となった。1つには、ICと本（モト）を一つにするアメリカのNPO・Up With Peopleの国際青年リーダー育成プログラムの訓練を受けた日本の若者が、10年目にして初めてこのプログラムにフルに参加したことであり、今後も日本人の青年の参加を継続させていきたい。

2つには、2011年3月11日以来初めて福島県を訪問できたことで、大地震・大津波・原発事故による放射能汚染という三重苦に苦悩しながらも、そこで健気に活動する若者や仮設住宅に暮らす人々の現状に触れることができた。これは前述の如く、今夏APYCに参加した福島大学の学生の招待により実現したものである。

3つには、今年新たに静岡県教育委員会の要請と仲介により、県下の富士市内の市立・県立の学校4校（小中高と特別支援学校）への訪問が実現したことである。これらはいずれも日本社会、とりわけ日本の教育界が内包する深いニーズ（国際化の進化・深化・新化と道德教育の内面化）に応えることができ、このプログラムが将来更に発展する可能性をも示している。そのために知恵を出し汗をかく人材をどのように育成していくか、その財源をどのように確保していくか、またそれを可能にする官民の連携と国内外の関連団体との連携をどのように構築・強化していくか等、新たな課題への対応が求められている。

## イ. インターンシップ・プログラム

### < 招聘プログラム >

1. 実施期間：2012年8月7日～9月7日

2. 招聘者：

(1) チョン・ジスン (鄭 志善、Mrs. Jung Jisun、韓国)

1979年1月31日生まれ。韓国のIC事務局「ファーストステップ・オブ・チェンジ」の専従スタッフ。主に韓国でユース向けのキャンプなどを企画・開催し、青少年の心のケアに尽力してきた。大学では化学とコンピューター・サイエンスを専攻。青年のリーダーシップトレーニングプログラムであるアクション・フォー・ライフ(AfL)第2回に参加。多くの国において様々なIC活動に従事した経験を持ち、第4回アクション・フォー・ライフ(AfL)では、参加者のコーディネーター役を務めた。その他、韓国のトランスパレンシー・インターナショナル事務局で働いた経験も有す。来日回数も多く、2009年にはIC学校訪問プログラムの海外ボランティアチームのリーダーとして活躍した。

滞在期間：8月7日～9月1日(25日間)

#### 活動の内容

日本のICが主催する第18回アジア太平洋青年会議(APYC)(テーマ：『KIZUNA 絆』、会期8月22日～29日)のために、マレーシア、台湾、ニュージーランドからの運営委員会メンバーが会議の開始前に準備のために来日したが、日本をよく知るチョン・ジスンさんは、特に初めて来日したメンバーの世話を当たった。第18回アジア太平洋青年会議の準備に当たっては、これまでの韓国でのアジア太平洋青年会議の企画運営や、他の国々での多くのアジア太平洋青年会議への参加の体験を活かし、まとめ役の一人として活躍した。会議(8月22日～29日)においては、運営委員会メンバーとして、会議のスムーズな進行と内容の充実に参加すると共に、韓国からの参加者の通訳(韓国語⇄英語)も担った。又、以前IC活動を通してホームステイを行った小田原での家族を始め、多くの日本人の知己と会うと共に、新たな日本の青年たちとの交流を行い日韓の相互理解と親善に努めてくれた。また、今回の来日を通して、日本の文化・歴史・社会情勢への理解をより深めてもらうことが出来た。

(2) ジェイムス・コーディネーター (Mr. James Codiner、オーストラリア)

1988年1月24日生まれ。電気関連会社(シドニー)勤務。シドニー大学でコンピュータと日本語を専攻し、在学中、慶応大学へ交換留学のため初来日。その後、日本語学校で勉強するために再来日し、日本語を上達させ日本文化への理解を深めた。就学を終えた2010年の秋以降も約3ヵ月半日本に滞在し、10月から11月までの2ヶ月間、ICインターン生として主にIC広報活動やICのユース活動を支援し、10月に開催されたICセミナーにも参加、プログラムの一つを企画・進行する等、幅広くICの活動をサポートした。昨年は、オーストラリア主催第17回アジア太平洋青年会議(APYC)をスタッフとして支えた。

#### 活動の内容

前年のオーストラリアでのアジア太平洋青年会議の開催の体験を活かし、日本でのアジア太平洋青年会議（8月22日～29日）の準備に当たった。又、会議中は、運営委員会メンバーとして、会議のスムーズな進行と内容の充実に寄与すると共に、ファミリーグループのリーダーとしてその進行も担うと共に、閉会式では、司会者の一人として式を進行した。更に、以前IC活動を通してホームステイを行った家族を始め、多くの日本人の知己と会うと共に、新たな日本の青年たちとの交流を行い、青年たちが他国のこと、世界のことにより関心を深め、家族を始め他の人々を思いやることの大切さや人間関係を向上させるためには何が重要かということへの理解を深めるためICの考え方を伝える活動を行った。

## 今後への展望

韓国のチョン・ジスンさんは、日本語の勉強も続けており、今後の日韓の架け橋としての益々の活躍が期待される。また、ジェイムス・コーディネーター氏も日本語がより堪能となり、今後の日豪の架け橋としての益々の活躍が期待される。

## 公益事業3 個人と家庭の健全な発展に資するための事業

### ア. ICセミナー

【概要】忙しい毎日の中で時には立ち止まって、自分の心のありようをみつめることが必要とされる。心を開いて、人の話に耳を傾け、自分の人生を語ることにより、自分の人生で直面している課題を整理し、前に向かうことができる。このICセミナーは、生きる力の源となる心を育て合う場となることを目指して開催されている。

#### (1) ICセミナー（富士箱根ゲストハウス）

10月17日～18日

『One World Family』のテーマの下、富士箱根ゲストハウスで開催されたICセミナーには前述した今夏のAPYCの参加者をはじめ、中国からの留学生、そして、小学生や社会人を含む25名が参加した。上記学校訪問チームの4名もこれに招かれ参加したが、彼らが学校訪問や多くの家庭でのホームステイ等を通して感じた日本社会の長所や弱点、又彼ら自身の体験等を参加者と共に分かち合った。

今回のプログラムは、「静かな時間」、「ストーリーテリング」による体験交流を通して、より良く生きる上での目標設定の必要性・重要性と人間関係への気付き、とりわけ家族に於ける人間関係とコミュニケーションの重要性についての新たな気付きと学びを深めるもので、参加者にとって有意義なものとなった。今回の企画・運営はすべて今夏APYCを担った若者が担当した。

### イ. ファミリー・ワークショップ

9月15日（土）・16日（日）

概要：台湾でファミリーワークショップを開発・発展させ、中国でも多くの家庭・家族の題解決に寄与している劉仁州氏から学んだ、“自分の家族の歴史や背景を知り、親への手紙を書くなど、実際のトレーニングを通して、自分自身の原点を知り、自己変革する”手法を基に、親子や夫婦の関係を改善するワークショップである。



9月15日・16日の2日間にわたるファミリーワークショップが開かれ9名が参加した。これは、この春台湾のリュウレンジュー氏による同様のワークショップを受けた5名が講師及びスタッフとなって開催された。

#### ウ. 各種交流会

概要：アジアの人々を始め、各国の人々との相互理解と信頼を深めるために留学生や在日外国人を交えた勉強会や交流会等を行う。又、小田原サークルや福岡、佐賀サークルを始め各地でのICサークル活動やICよつ葉会、又IC関連プログラムへの支援・協力をを行う。

- (1) 交流会「学校訪問交流プログラムの体験報告」 10月21日  
この会では、前述の学校訪問チームの4人がこれまでの交流会の成果とそこで気づき、学んだ体験を報告した。

### 公益事業4 国際相互理解と友好を促進するための共同事業

#### イ. スイス・コー国際会議

7月～8月

コーでは世界の人々と出会い、マスコミの報道等では知りえない各国の現状をつぶさに知ることができる。又、ICの精神に賛同する各国の人々と広いネットワークを結ぶことができる。このコーで、IC活動を世界の平和と融和のためにより効果的に推進する方法を話し合うために開催されたグローバル・アセンブリーに1名が参加した。

#### エ. インドICとの共催のコー・イニシアティブス・フォー・ビジネス (CIB)会議

2007年以来、日本とインドのIC協会は隔年でインドのICセンター「アジアプラトー」で持続可能な社会の創造をテーマに会議を開催してきた。2013年は、11月7日から10日にかけて第4回CIB国際会議が予定されており、今夏インドからAPYCに参加した青年2人がそのプロモーションのために日本滞在を1週間延長し東京と小田原地区で関係者に会いプロモーション活動を行った。今回のテーマは、「持続可能でゆるぎなく、人や自然と調和する経済成長への可能性とチャレンジ」が予定されており、インドICを軸に関係国間で調整と準備の会議が行われている。

### 公益事業5 機関紙等の発行による啓発事業

機関紙「ICたより」の編集を進めたが、発行は次年度となる。

以上